

<会員のひろば>

子どもたちの生協運動に向かって

橋本吉宏(愛知県/めいきん生協総合企画室)

新しい展開をはじめた生協運動

1) 子育てを終えた生協組合員による家事援助活動が開始され(くらしたすけあいの会)、文化の分野でも女性たち(母親ではなく)に担われた新たな文化協同の活動が始まっている(『文化協同のネットワーク』)。しばらく母親の運動として発展してきた地域での生協運動が、いま新たな担い手の登場によって、これまでになかった展開をし始めた。

男たちも「俺達にやらせろ」と人生80年代の生きがいとして仕事おこしをめざし新たな協同組合づくりをスタートさせた。留学生がかかえる生活課題を協同して解決できないかとの相談も始まっている。女性たちのワーカーズ・コープもすでに活動を開始した。

2) そして、ここにまた新たな運動の担い手が生まれる可能性が提起された。それは、子どもたちである。

調査報告「小学生および家庭の食生活と生協の課題」のなかで、名古屋短期大学の小川雄二先生は次のように指摘する。

生協加入家庭は食生活を大切にしていることが良くわかります。しかし全体を通してみると、子どもたちが次代のすぐれた生活者として育ちつつあるとはいいい難いようです。

食事、おやつなどの母親の配慮が行き届く範囲での食生活はますますですが、もっと生活技術面での自立が望まれます。

(『めいきん生協の現状と90年代への課題』より)

従来の生協運動が、「子どものため」の母親たちによる運動であったことを反映し、生協が子どもたち自身の成長の場とはなりえていないことを

指摘し、子どものための運動から、子どもたちも運動主体に加えた、子どもとともに歩む生協への発展が提起されたのである。

3) 日本における子どもたちの状況は、企業社会ともいわれる今日の競争社会のなかで深刻さを増している。そのなかで「確かにこの20年間の親との共同生活は子どもの価値観に影響を与えた。が、この先、子ども達は仲間と協同しながら自らの暮らしを切り拓いていくだろうか。その力を身につけているだろうか。」(木下かよこ「子ども協同組合」の胎動」:めいきん生協広報誌)という組合員の思いは、一層大きな広がりをもつに違いない。

そして'60年代後半からの母親たちの生協活動のなかで生まれ育った子どもたちが、いま第2世代の生協組合員として、生協でがんばってきた自分の母親の姿を頭に描きながら、自らの子育てを始める時期を迎えている。

生協運動の中の子どもたちの発見

1) むろん、私たちの生協にあっても、けっして子どもたちは不在ではなかった。産地訪問や稲作体験、子どもの料理教室、川や空気的环境調査、子どもたちによる広島への平和の旅、生協施設を利用した地域親子文庫など。そして、児童書の共同購入企画や、運動靴・下着・机をはじめ子どもたちのための商品づくりもすすめられてきた。

2) 全国の生協にも、さまざまな実践を発見することができる。コープさっぽろには、専任担当者をおいた図書館が生協店舗ルーシーに開かれている。地域教育センター活動で知られる山形・共立社では子育て協同を考える地域集会を重ね、93年春には第6回集会の開催を予定している。ちばコープでは、「アット! ジュース」が子どもたちの添加物の生活学習材として、子どもたちの心を捉

えていた。コープこうべでは、グレード別のサマーキャンプやふるさと村など野外活動のなかに子どもたちの協同の視点がすえられている。

3) 農協運動のなかにも、子どもたちへの思いがこめられた活動がある。愛知の東知多農協では、長野の飯綱農協と提携し山の子どもと都市近郊の子ども相互の交流を重ね、子ども協同組合の構想も話題にのぼっている。体験稲作の受け入れや料理教室など、全国の農協にはさまざまな実践がある。また鳥羽・桃取町漁協では山の子どもたちを漁村に迎え入れての実践を重ねている。

4) 子どもたちの協同組合運動は戦前からの歴史も持つ。昭和6年には産業組合が子ども協同組合の組織を提唱し、戦前の市街地消費組合の中でも子ども組合が組織され、戦後も農協が対応し子ども協同組合が各地の学校に生まれ、それは現在にも受け継がれている。

子どもたちの生協運動にむかって

1) 私たちは、これら実践の検討を通し子どもたちを、子育ての対象としてだけでなく、育ちの主体として据えることの大切さを学ぶ。また、将来の協同組合の主体であるだけでなく、今を生きる子どもたちの生活に着目し、そこでの生活協同の意義と可能性を考えている。

これらの経験を発展させ、子どもたち自身の参加の場を広げ、母親たちがそうであったように、子どもたち自身もその参加を通して、社会に〈協同〉を広げる力をもった子どもたちへと成長していけないだろうか。

2) 子どもたちの生協運動は、子どもたち自身による生活協同の運動である。生活主体としての子どもの把握、子どもたちの協同組織の性格とあり方の検討が必要である。生活主体としての相互形成にあっては、人間協同、がもつ教育(学)的価値が深められ、運動実践に生かされねばならない。

3) 子どもたちの生協運動は、子どもたちの学習過程でもあり、それは家庭での生活を通した学習と連携しながら、協同化された独自のプログラム

と教育体制を必要とする。四季を通した産地訪問による農業体験などのためには、産地での普及員や農業高校などとの協同が必要になる。これまでの生協運動は、産地やメーカーの中にこうした可能性を多く掘り起こしてきたはずである。沢山の地域で働くひとたちの力を発揮されるはずである。

4) 子どもたちの生活材の開発を通し、子どもたちのくらしとその主体を育てる活動が組織される。子どものための食器の開発は、家庭における食卓と食事のデザインと一体のものである。日本の食生活と食器の関わりは、日本の食事のもつ興味に光をあてる。

5) 協同組合を志向する学校づくりや新しい保育協同の動きが、地域での子育て・教育運動の中からも生まれ始めている。それらは、いずれもその基礎に協同の思想を育んできた運動であり、その運動主体を協同組合として発展形成させようとすると共に、子育て・教育の中に協同の原理を生かそうとするものとなっている。

それらとの連携・協同を積極的に追求することになる。学校と家庭との中間に多様な教育協同空間を組織し、地域の教育協同体を再生し新たに生み出していくことも展望したい。

6) このような意図から、'91年7月に名古屋でスタートした〈子どもたちの生協運動〉研究会は、全国的な視野に立った問題整理の作業に着手している。全国の賛同が得られるのならば、子どもたちの生協運動を考える生協全国集会も開催できたらと希望をふくらませている。(1992. 12. 1)